

近畿学校保健学会通信

No.11

昭和42年5月25日

第14回近畿学校保健学会事務局

奈良市高畑町

奈良教育大学 保健学教室

TEL 奈良 24 - 1101

近畿学校保健会と近畿学校保健学会の一体化を求む

近畿学校医連合会理事 谷 口 正

去る2月12日大津市で開催された第15回近畿学校医連合会の席上、大阪府・京都府其の他より近畿学校保健会の組織化と大会開催実現の要望がありました。全国的には既に各地方にそれぞれの学校保健大会が盛大に開かれているのに学校保健に於ける開祖的な歴史を持ち、指導的人材の多い近畿にこの種の大会が未だ開催されてないのはどうした事であろうか。その原因は色々と考えられますが、従来の近畿学校医研究協議会が連合会に改組され近畿の学校医が大同団結して下からより上がる気風を作ってきた事が此の保健大会開催の一つの溢路の突破口になって来ていると考えられ今が最もよい機会と思われます。

近畿各府県市には各々の保健会が持たれ大会が開催されているので、お互が横に連けいし合い各府県市教育委員会が手をつないで呉れば、実現もむつかしいものではないと思います。教委も従来の7職種の会が一丸となって保健会に総括され、各々が部会を作る方がすっきりとした組織になり学校保健推進の為になる事はわかって呉れると思います。従来の会をその儘にしてその上に近畿学校保健会を作る事は屋上屋をかく事になり反対します。只此の際、近畿には特に進歩的な水準高い近畿学校保健学会が盛大にもたれています。此の学会も保健会と合流して貰えば学会の研究が此の会の実践教育と指導になり研究と実践の二つがかなえられて好都合と思います。去る近畿学校医連合会の席上、柿原先生は「近畿地区学校保健大会に近畿学校保健学会としても参加して近畿の学校保健の為に微力をつくしたい云々」の挨拶を受けて我々は意を強くしたのです。学校医連合会の担当県として我々は此の問題の実現に微力を尽くしていますが、第一は近畿の各府県市教育委員会が賛成し、横に手をつらねて呉れる事が先決と思い先日要望書を各教委に送りました。第二は近畿学校保健学会が何等かの形で此の会に参加して貰い大会に花を添えて頂く事を考え、永井先生の要請に従って駄稿をしたためました。学校保健学会の御先生方の御協力御指導を賜りたいと存じます。

学校保健学会と保健会の一体化について

京都市学校保健会長 奥 岩 吉

今日の社会は、科学の進歩と人文の発達に伴い、研究の領域や学説は微に入り細を穿って止まるところを知らない。そのために一を知って十を察せざる人間が生まれ、分科の弊害はようやく顕著になろうとしている。

この時にあたり、科学者の考慮すべき点は、お互に知識・経験の交換、交流ということではなかろうか。

いたづらに限られた分野を固守して、他人の意見に無関心な態度は、決して学問の進歩、社会の幸福に貢献する所為ではないと思う。

わたくしは、学校保健学会と学校保健会とは本質的に同じものであって、強いて異なるところといえば、

一は頭腦的であるが素材に苦しみ、他は素材に不自由しないが頭腦に不足を感じることはなかろうかと思う。したがって両者が有無相通すれば、社会のために、さらにまた学校教育のために、どんなに意義深いものか測り知れないものがあると考ええる。

世界の平和、人類の幸福は文化の交流から始まるというが、全く目的を同じくする両団体が、密接に手をつなぐのは、水の流れに従うもので、自然の成りゆきではなかろうか。哲学は分科をいとい総合を尊ぶというが、哲学的に考えて、両者が一緒になるのは一種の宿命ではないかと思う。われわれ近畿学校医会、ないしは近畿学校保健会（設立準備中）もおそらくその傾向にあると信ずるのである。

学校保健学会の運営について

——特に近畿学校保健学会の場合——

大阪府学校保健会顧問 学校医 長谷川 等

日本学校保健学会の初端は昭和29年、第4回全国学校保健大会（松江市）の開催された時だった。従来の全国大会の学術専門分科会即ち、大学関係者や研究団体の指導者の部会を独立させて営まれたのが始まりで、全国大会におくれること3年だった。そして、その地方学校保健学会の一つとしての「近畿学校保健学会」も同年、大阪学芸大で発足した。この事については昨年3月の学会通信No.7に詳しく述べた。この様に、「学校保健大会」から「学校保健学会」が分離したことは当然のことであった。

学校保健大会は全国大会であれ、地方大会であれ、府県大会であれ、凡て学校保健の具体的問題を実践的にどう解決すべきかが主眼であり、学校保健学会は学校保健の諸問題を理論的に追求し、その学術的業績を実践の場に移す。言いかえれば、大会は理論を実際の活動へ、学会は実際問題を理論的解決への方向をとると考えてよい。従って、大会は実践家が中心となり、学会は理論家が中枢となって営むと考えたらよい。随分以前に竹村先生が学校衛生の「学」と「行」とを説かれたのがこのことである。この学校保健の両面は決して軽重あってはならない。これを本質的に相容れないものとする人があれば大変な間違である。これが学校保健の実態なのである。といって、「学校保健」の出発当初の様に合同してもいけないし、現在の様に全く分離しても困るのである。

この考えて私達は大会と学会をできるだけ密着させ、交流させるために時と処を接近させて開催することを要望しておるのである。そのために、私達は、学会への学校保健会の協力と全員参加、それに関係教育委員会の理解と援助を目標として努力して来た。

学会運営に当っては、学会の学術業績発表は単なる発表として終わらずに、必らず教育実践家の会員の教養の糧ともなるような指導の意味があてはしいし、実践家の発表は決して軽視、侮蔑せず、現場の問題として採りあげ、理論的に解説し指導してほしいものである。この様なあり方を「教育的の学会運営」と表現したいのである。これは恐らく学校保健学会だけの特色と考えてよいと思う。なんとすれば現在の日本の教師たちは学校保健についての教養は最低である。従って若し学会に参加出席するとすれば、殆んどの会員は「参加することによって何かを教えられる」ことを予期しておる故に、正しく「教育される容体」に外ならない。だのに学者達の講演が単なる学術的発表で終始したとすれば、そこには「教育する主体」の不在ということになり、私達の願は達せられなくなる。これでは学校保健会からの参加の意味は軽減する。

この考え方は間違で、学校関係の会員の参加がなくとも学校保健学会は学会だとするならば、その時こそ医学会の一分科学会に転化すればよいのである。この意味で、今回の奈良学会は学会、県学校保健会、県教育委員会三者の共催という協力により営まれるのであるから、さぞかし私ども希望以上の成果をあげられるであろうことを期待している。

学会と保健会との一体化への提言

大阪学芸大学 教授 榊 原 栄 一

近畿学校保健学会が発足して、間もなく第14回目の誕生日を迎えようとしている。この学会の趣旨は、戦後の教育制度の抜本的な改革に当り、健康こそは人間の享受した特権であって他から犯すことのできない尊厳なものであるという人間の存在理念に立脚して、その尊厳性とその保持増進のための知識を科学的に探究する目的をもった組織団体として発足したものと聞いている。学会という団体は、その固有名詞の学術文芸の研究と奨励を目的として組織せられる団体であるから、学校保健という固有名詞から学徒児童の健康を保持増進するための学術研究の団体でなければならない。近畿学校保健学会の過去14年間の歩んだ道は終始一貫この理念であったと信ずるものである。しかしながら、学校保健を教育の場に求めた時、教科・知育優先的な我が教育界の中にあっては、坦々たる道ではなかったし、現在も将来も幾多の宇余曲折、日暮れてなお道遠いことを痛感させられる昨今である。

ところが幸いにも、否、当然なことながら教育制度の再検討の嵐の中で、全人的な人間形成が教育の究極の目標であると騒がれてきたのである。あまりにも当然のことではあるが、試みにこの言葉は、健康教育の必要性におきかえたとしてみると学校保健学会の行手は実に洋々たるものが期待できるのではなかろうか。

今一つ、学徒児童のすこやかさを保たせるための管理指導団体として学校保健会のあることを多くの関係者は知っている。しかも本会の主要構成員である医師、薬剤師、歯科医師、養護教諭、保健主事などは、小・中・高等学校において児童・生徒の健康管理者、指導者あるいは教育者として、それぞれの地区における第一線の推進者である。紙面の都合で保健会の組織について詳述できないが、各地区及び全国的組織で活躍しており、全国大会や地域、地区大会も毎年開かれ、また学術部門をようして研究発表会も盛大に実施されている。

今日、近畿学校保健学会の発展をみると、本学会活動の主要部分は保健会関係者各位の御尽力の賜といっても過言ではなかろう。前述のような全人的な人間形成、健康教育の必要性の強調される秋、学会と保健会は、さらに深く連繫して、地区の・日本の健康教育を推進する責務があることを痛念する一人である。来る6月11日の総会に両会の連繫とその実現化を今一步具体的な体型に樹立できるよう提案するものである。

学校保健に望む

京都教育大学 教授 山 岡 誠 一

「保健」という言葉はとかく消極的に解されやすい。健康をそこなった者を保護し、あるいは正常体に導く治療医学的な考えや、正常者の健康をそこなわないようにする予防医学的な面のみを「保健」とあるいは「衛生」と考えられやすい。学校の環境を健康的に整備し、教育を受ける児童・生徒が学校生活中に健康を害しないように留意するとともに、健康診断や健康観察によって異常者を発見し適切な処置を講じることは大切である。しかし、さらに心身のよりよき発育、よりよき健康を企図する積極的な増健への心構えも必要である。

温室の中は無風状態であり、温度・湿度その他の条件が最良に保持される。その中で育った草花はきれいであるが、か弱い。炎熱や風雪に耐え忍んだ野辺の雑草は強く、旺盛な生活力をもっている。学校給食を始めとする学校保健活動の普及・発展、その他もろもろの条件の改善によって、児童・生徒の疾病異常は少なくなり、体格が著しくよくなってきたが、体力がそれにとまなわなことは、積極的な身体訓練の機会に恵まれないことに原因がある。これは現今の知育偏重の学校教育や運動施設の貧弱なことにも起因するが、「保健」や「安全」の教育が学校行事を消極化させ、活発な身体運動を要求する体育の時間さえも、その運動量を制約していないだろうか。環境の整備は好ましいが、これがまた温室教育に陥しいれやすい。家庭でも

「外で遊んでけがをしないとけないから」と家の中で静かにテレビを見せ、「よく勉強するから」とオヤツ（主として澱粉質の）を与える。栄養（カロリー）過多と運動の不足は肥満児を作り、英才教育が豚児教育となっている場合がある。

学校保健は消極的な養護本位でなく、積極的に健康増進に向ってほしい。強い子はより強健に、弱い子は弱い子なりに体力、健康度を増強するような前進的な姿勢が必要である。そのためには精密な健康診断によって異常者や要注意者の発見に努め、十分な健康ないしは体力管理のもとに、児童・生徒個々体力や健康度に応じて、科学性のある増健への学校保健を望みたい。

わかり切っていること

大阪学芸大学 教授 目 黒 庸 雄

今回不馴れな私に会長より何か書けと命ぜられました。学校保健に関し不勉強な私は戸迷って居りますが、切り切っていることながら、日頃考えて居ることの一端を申し上げ度いと思います。狭少な国土で、人口密度が極めて高い我国では寿命を全うし得ずに死亡して行く人が如何に多いことか、今朝の新聞にも、たのしめる可き連休中に大阪府だけでも3組の母子心中があったことを報じて居ります。過密に悩む都市生活に疲れ、1組はノイローゼになった母と2才の男の子、もう2組は何れも家庭不和を苦しめた母親と1才の女の子でありました。世の親達は子供は自分のものと云う身勝手な解釈をして居るようで、うまくいけば、子供を自分の人生の延長と考え、教育パパや教育ママとなる。一步しくじると、命迄奪ってしまうのであります。子供の人格を尊重し、社会のものと考える欧米では、親子心中などは考えられないようであります。この点国家にも子供を守る社会制度が欠けていると思います。子供の日の前後にこのような悲しむべき事件がつづいたのは皮肉であります、子供の日は文化、福祉国家としての条件が整った時初めて語うべき日であると云うことを反省してみる必要があると思います。その他凶悪な事件、人災による事故死等毎日のように新聞を賑わして居りますが、全て保健教育の欠如による生命の軽視に端を発していると言っても過言でないと思うのであります。

又病気になって始めて健康の有難味を知り、病気の経験者のみが、健康の貴さを評価出来るのであります。然しこれとても、喉元過れば熱さ忘れ、或いは羹に懲りて膾を吹くの諺の如く、健康状態がつづく、健康の有難味は分っていても、これを大切に作る為の手段は等閑にし勝ちであります。又ポリオが流行したと云っては、必要以上に騒ぎ、日本に未だポリオワクチンの基準が出来てなくて、外国の生ワクチンを直ちに使用すべきか否かで政府が大いに困惑したのはつい先年のことであります。マスコミの影響が非常に大きくて、これを正しく批判する力が無かったからでありましょう。マスコミに左右されず、正しく批判出来る知識が欲しいものです。児童時代からの積み重ねられた徹底した保健教育を必要とするものであります。

神戸大学 助教授 武 田 真太郎

この学会通信のNo. 1で、神戸大学の佐守教授は、「学校保健は学校現場に結びついたものでなければなりません。しかし、それが学会である以上、学問の場であるのであるから、その発表され、あるいは、討論される内容は、現場から得た問題を一度ある学問的な水準の深さにまで掘り下げ、再び現場に帰すというものでなければならないと考えております」と述べておられます。私も今までの学校保健学会に同じような期待をもって参加してきましたし、このたびの奈良で開かれる学会に対してもこのような学会のあり方であってほしいと思っております。そして、この学会の背景にある現場は、きょうも子供たちがピチピチと躍動し

ているあの教育活動の場なのだから、たとえば、上下水道や環境衛生の諸問題が演題として取り上げられる場合でも、その研究や調査の根底に、公衆衛生や産業衛生と共通した問題が多いにはちがいないが、教育の現場で展開される学校保健としての理念がおのずから流れていなければならないと考えております。また、討論に際しても、お互いの主張は異なっても、この教育の場に役立つという共通の願いがあればこそ、学問的なきびしさのうちにまごやかな雰囲気がかもし出されるのだと思っております。私はこうした立場からたとえささやかな研究報告であっても、それをもとに学問的な掘り下げが行なわれるよう会員の方々に真剣な討論を思ふ存分に展開していただきたいし、この討論を通じて、私どもが神戸の学会に主題としてかかげた「とくに教育と関連した学校保健」をさらに深めていただくことを期待しております。

近畿学校保健学会名誉会員、幹事、評議員名簿（昭和42年5月現在）

名誉会員（五十音順）

伊賀 政雄	伊良子光義	岩田 正俊	千田 勇	竹村 一	故 豊田 順爾
西 起三郎	長谷川 等	富士 貞吉	三浦 運一		

幹 事（五十音順）

大 阪 府

伊東 祐一（大 阪 学 大）	今井 英夫（大 阪 学 大）	上林 久雄（大 阪 学 大）
榊原 栄一（大 阪 学 大）	住吉 薫（大 阪 市 教 委）	高木俊一郎（大 阪 学 大）
館野 進（大 阪 府 教 委）	辻 勝流（大 阪 市 教 委）	長谷川 等（大 阪 府 保 健 会）
富士 貞吉（常 盤 会 短 大）	藤井 すゑ（大 阪 市 教 委）	藤下 成周（大 阪 学 大）
細部新一郎（大 阪 市 薬 劑 師 会）	三隅 珠一（大 阪 府 教 委）	目黒 庸雄（大 阪 学 大）
山本 勝朗（大 阪 市 大 家 政）	安藤 格（大 阪 学 大）	

京 都 府

奥 岩吉（京 都 市 保 健 会）	川畑 愛義（京 大 教 養）	合田 博（京 都 市 教 委）
西田 義文（京 都 府 校 医 会）	山岡 誠一（京 都 教 育 大）	山本伊豆子（京 都 市 教 委）
米田 幸雄（京 都 教 育 大）	吉岡 文雄（京 都 女 子 大）	

兵 庫 県

和泉 正忠（京 都 市 保 健 会）	巨田 泰信（兵 庫 県 教 委）	佐守 信男（神 戸 大 教 育）
武田真太郎（神 戸 大 教 育）	竹村 一（芦 屋 大）	戸田 嘉秋（神 戸 大 医）

奈 良 県

橘 重美（天 理 大 体 育）	永井豊太郎（天 理 大 体 育）	中牟田正幸（奈 良 教 育 大）
-----------------	------------------	------------------

和歌山県

川口 吉雄（開 業 医）	白川 充（和 歌 山 医 大）	千田 勇（和歌山県校医会）
--------------	-----------------	---------------

滋 賀 県

片岡 慶有（滋 賀 県 保 健 会）	細井 毅（滋 賀 大 教 育）	本郷 節哉（堅 田 保 健 所）
谷口 正（滋 賀 県 医 師 会）		

地元幹事

緒方 準一	北 喜八郎	小林 秀男	橘 重美	永井豊太郎	仲 定則
中牟田正幸	土居 正一	岩田 渾一	泉川 賢一	円山 幸子	鶴田登代子
前川 澄	森本 稔				

評議員（五十音順）

大 阪 府

東 久太郎	青木 一英	伊賀 政雄	伊東 祐一	今井 欣悦	今井 英夫
今西富太郎	上延富久治	宇川 進	内田 一郎	内海 潤	大坂 利
大迫 昌三	岡田 弘也	川北 信雄	河田 稔	上林 久雄	岸 堅一
貴志 吉子	後藤 英二	紺屋 茂	榊原 栄一	桜井米次郎	嶋田 豊春
島田 良造	清水孝之介	杉田 貞三	住吉 薫	園 つるえ	高井 俊夫
高木俊一郎	滝藤 尊教	竹内 和子	館野 進	谷岡 彬	辻 勝流
津田 勝	寺岡 政代	土井 久子	中 脩三	中井善一郎	長沢 治恵
西尾 伸一	西川 吉保	野口 陽二	橋爪 鶴楠	橋本 滋子	長谷川 等
原田加寿美	福井兼太郎	富士 貞吉	藤井 すゑ	藤下 成周	藤田 順治
藤田 元洋	細部新一郎	丸岡 隆二	松山トシエ	三隅 珠一	見田発巳郎
三谷 隼雄	目黒 庸雄	森山 八郎	八木 常行	安田 慶二	山口 竜之
山本 勝朗	弓場 靖	吉田 泰	米田 万作	川村 敏行	安藤 格
中西 芳三	中村 金子	布川 宗治	古井 司	原田 龍夫	塚本 常明
加山寿美枝	森 茂一郎	和田三十郎	村上平一郎	山本 紀子	

京 都 府

家村 勲	伊藤 一生	上田雄佐武	大島 要	奥 岩吉	奥 芳男
川畑 愛義	北川 賢二	北川 正夫	熊本 水頼	栗栖マサエ	中南 忠雄
合田 博	森下スミエ	杉山 茂	高田喜太郎	竹島 喜造	立川 明
田村豊太郎	永井 秀夫	西田 義文	額田 衆	駒寄 忠政	平井 新司
藤原 元典	藤本芝都英	万井 正人	三浦 運一	宮田 尚之	木船 貞次
山岡 誠一	山本伊豆子	吉岡 文雄	米田 幸雄	渡辺嘉之助	

兵 庫 県

和泉 正忠	稲次 優	今出 悦子	大川 勲	加藤 哲夫	巨田 泰信
喜田村正次	笹間 弘	佐守 信男	武田真太郎	竹村 一	塚本 利之
常松 喬	出口 庄佑	戸田 嘉秋	友田喜一郎	丹羽 正	野瀬善三郎
守屋 光雄	横尾 能範	森川 進	太田	山城 正之	

奈 良 県

緒方 準一	泉川 賢一	今中 多平	岩田 渾一	上田 忠雄	岡田 清
唐沢 友江	木村 一雄	北 喜八郎	小林 秀男	土居 正一	高宮 勝
橘 重美	鶴田登代子	土谷 繁雄	中村 信二	仲 定則	永井豊太郎
内藤 七勝	中上 重男	仲野 秋雄	仲村徳三郎	中牟田正幸	円山 幸子
森村 文治	松井 正彦	前川 澄	平井五兵衛	福岡 澄郎	馬場 春代
安田利三郎	大和 平易				

和歌山県

小沢 忠治	川口 吉雄	小出 陽造	白川 充	千田 勇	玉置 辨吉
藤田 利雄	笠松 勇次				

滋 賀 県

大西 輝彦	片岡 慶有	河並 一郎	佐竹みね子	細井 毅	本郷 節哉
山の内種清	井田貞次郎	中沢 敬	谷口 正	安土京二郎	

近畿地区日本学校保健学会役員名簿

理事（五十音順）

伊東 祐一 川畑 愛義 佐守 信男

評議員（五十音順）

和泉 正忠	伊東 祐一	今井 英夫	伊良子光義	奥 岩吉	大西 輝彦
片岡 慶有	加藤 哲夫	川口 吉雄	川畑 愛義	喜多村正次	合田 博
榊原 栄一	佐守 信男	白川 充	杉山 茂	千田 勇	高井 俊夫
高木俊一郎	高田喜太郎	竹村 一	武田真太郎	戸田 嘉秋	橘 重美
出口 庄佑	西 起三郎	永井豊太郎	中牟田正幸	西田 義文	長谷川 等
平井 新司	富士 貞吉	細部新一郎	三浦 運一	宮田 尙之	目黒 庸雄
山岡 誠一	山本 勝朗	吉田 文雄	米田 幸雄		

今回の学会通信の印刷は「三笠コカ・コーラ」の御好意によるものであることを附言します。